

■ 解答・解説

問1 答え：「いとど」＝ますます・いっそう。説明＝（須磨での寂しい暮らしの中で）いっそう物思いをかきたてる、もの悲しい秋風のこと。

解説：「いとど」は程度がさらに増す意。ただでさえ寂しい須磨に吹く秋風が、いっそう源氏の物思いをつのらせる、という文脈です。

問2 答え：あれこれと物思いをすること。心を悩ませ、気をもむこと。

解説：古文の「心づくし」は「心を尽くす＝あれこれ思い悩む」意で、ここは「物思いをさせる秋風」の意。現代語の「心づくし（相手のための真心・心遣い）」とは意味が違うので要注意の頻出語です。

問3 答え：行平もかつて(政治的な事情で)都を離れて須磨にわび住まいをしたと伝えられており、同じように都を離れて須磨に来た源氏が、自分の境遇を行平に重ねているから。

解説：須磨という同じ土地で、都を離れてさびしく暮らす者どうしという共通点があり、源氏は先人の行平に我が身を重ねています。

問4 答え：①「けむ」＝過去推量（過去の伝聞・～たという）。②人名＝在原行平（ありわらのゆきひら）。③もともとは行平の和歌「旅人は袂涼しくなりにけり関吹き越ゆる須磨の浦風」（古今集）をふまえた表現。

解説：「関吹き越ゆる」は行平の歌を引いた言い方で、過去のことを伝え聞いて述べているため「けむ」は過去推量（過去の伝聞）。行平はかつて須磨にわび住まいしたと伝えられます。

問5 答え：ヤ行下二段活用の動詞「聞こゆ」の連用形＋接続助詞「て」。意味は「（自然に）聞こえる」。

解説：「聞こゆ」は「自然に聞こえる・耳に入る」が原義。ここは波の音が聞こえる意です。

問6 答え：主語＝浦波（波の音）。理由＝下に「給ふ」などの敬語が付かず、主語が人ではなく波だから（謙譲語「申し上げる」の意ではないから）。

解説：「聞こゆ」には謙譲語「申し上げる」の用法もありますが、ここは波が自然に「聞こえる」意で、敬語ではありません。

問7 答え：またとなくしみじみと趣深く（もの寂しく）感じられるものは、こういう（須磨のような）所の秋であったのだなあ。

解説：源氏が須磨の秋の寂しさをしみじみ実感する気持ちを表す一文です。

問8 答え：①「またなく」＝またとなく・この上なく。②「あはれなり」＝しみじみと心打たれる、もの寂しい。③「けり」＝詠嘆（～だなあ）。

解説：「なりけり」の「けり」は、今あらためて気づいたことへの詠嘆を表します。

問9 答え：お側に仕える人もたいそう少なく、その人々も皆寝てしまっている中で、源氏ただ一人が目覚ましている、という孤独な状況。

解説：「人少なに」「一人目を覚まして」から、源氏が周囲から切り離されて一人きりでいる心細さが読み取れます。

問10 答え：枕を立てる(頭を起こす)ようにして横になったまま、四方から吹きつける激しい風の音にじつと耳を澄ましている様子。

解説：眠れぬまま、ひとり風の音を聞いている源氏の、寂しく沈んだ様子を表します。

問11 答え：波がちょうどこのすぐ近くまで打ち寄せてくるような気がして。

解説：「心地す」＝～のような気がする。実際以上に波が間近に迫る気がするほど、源氏の心が波の音に占められていることを表します。

問12 答え：①涙があふれて、枕が浮くほどになってしまった、という状態。流す涙の多さを「枕が浮く」と大げさに言い表した誇張表現で、源氏の深い悲しみ・孤独を強調している。②「に」＝完了の助動詞「ぬ」の連用形／「けり」＝詠嘆の助動詞。

解説：実際に枕が浮くはずはなく、涙の多さを強調する誇張表現です。

問13 答え：訳＝涙が落ちるとも気づかないうちに。説明＝自分では泣いているとも気づかないうちに、枕が浮くほど涙を流していた、という流れになり、知らぬ間にこれほど泣いていたという源氏の悲しみの深さが強調される。

解説：「おぼえぬ」＝気づかない・自覚しない。無意識のうちに涙していたという表現が、悲しみの深さを際立たせます。

問14 答え：「すごし」＝ぞっとするほどの寂しい・すさまじい。理由＝自分で弾いた琴の音が、我ながらひどくもの寂しく聞こえたので、かえって悲しみがつのり、途中で弾くのをやめてしまった。

解説：「弾きさす」＝弾くのを途中でやめる。琴の音までもが寂しさを誘うため、源氏は最後まで弾けなかったのです。

問15 答え：(私が) 恋しさに堪えかねて泣く声と聞き間違えるほどの浦波は、私が恋い慕っている(都の)方角から風が吹いてくるからであろうか。

解説：自分の泣き声のような浦波の音を、恋しい都の方から吹く風のせいかと想像する歌で、望郷の念がにじみます。

問16 答え：①「恋ひわぶ」＝恋しさに堪えられず嘆く。②「まがふ」＝(よく似ていて) 区別がつかない・聞き間違える。

解説：自分の泣き声と浦波の音が「まがふ(紛れる)」ほど似ている、という表現です。

問17 答え：源氏が恋い慕う人々のいる都の方角。

解説：「思ふ方」は、源氏が思いを寄せる人々のいる都を指します。

問18 答え：「らむ」＝現在推量(今ごろ～ているだろう)。係助詞＝「や」。

解説：「風や吹くらむ」は、目の前では見えない都のあたりで今まさに風が吹いているのだろうか、と現在の事態を推量する「らむ」。係助詞「や」を受けた疑問(反語的なつぶやき)の結びです。

問19 答え：ただ一人を離れた須磨で、波の音を自分の泣き声かと聞きまちがえるほど孤独に沈み、その波を運ぶ風さえも恋しい都の方から吹くのかと思いをさせる、深い孤独と強い望郷の念がこめられている。

解説：孤独(一人きりで泣く源氏)と望郷(都への思い)が一首に凝縮されています。

問20 答え：源氏の歌を聞いた人々が、感動のあまり涙をこらえきれず、起き上がっては、人目を忍ぶようにそっと鼻をかんでいる様子。

解説：「忍ばれで」＝こらえることができないで。源氏の歌と心情が、周囲の人々の涙まで誘ったことを表します。

問21 答え：①作者＝紫式部。②成立＝平安時代（中期、十一世紀初め）。③五十四帖。④作り物語（作り物語）。

解説：『源氏物語』は平安中期に紫式部が著した全五十四帖の長編物語。『竹取物語』に始まる虚構の物語の系譜は「作り物語」と呼ばれ、『伊勢物語』などの「歌物語」と対比されます。
